

私の入学した時の先生は工藤修作先生で、たいへん優しい先生でした。初めての質問に天皇様は何処におられるかと問われた時に、ある生徒が、ほこらしげに大声で、天皇様は天に居ますと答えたことを思い出します。あの優しい工藤先生が転動する時、大野町の牧原まで見送り、先生の姿が遠く見えなくなるまでサヨナラくんと手を振り、泣きながら別れを惜しんだことは、いまだに忘れることができません。現在も変わりはないけれど、先生と生徒との情愛の深さをつくづくと感じさせられます。

さて、当時の弁当とはいえば、麦・粟の飯に梅干・漬物・味噌がおかずでした。しかし、それさえ持つてこれない者もかなりいました。また雨降りには、一本のカラカサを二人でさしたり、竹の皮で作ったバッチョラをかぶって通学したものでした。私が尋常四年を卒業する時、丁度学制改革があり、尋常科が六年に、高等科が二年に改制され、その時井田小学校から木造二階建校舎一棟を分譲移築し、同時に本村より通学していた生徒全員を長谷に帰村させ、教頭の三原信好先生を初代校長として迎え、ここに新たな長谷尋常高等小学校が誕生したのでした。そして、尋常五・六年と、高等一・二年はいずれも複式学級でした。私共四十名近い同級生も高等科に進学する者は僅かに八名でした。時の校長先生は、学校教育は勿論のこと社会教育の充実、学校基本林の設定、産業の奨励等で偉大な功績を残されました。本村にとっては大恩人の幸新作校長先生でした。

その後、奉安殿、忠魂碑、中学校、公民館、幼稚園、プール等々幾多の変遷はありましたが、中でも、和服が洋服に、草履が靴に、風呂敷が鞆に、傘がカッパやコーモリ傘に、徒歩が車に、弁当が米飯にと、時代の推移とはいえ、まことに驚きの外ありません。

思えば、あの当時、苦しい環境の中で、真剣に教育して下さいました諸先生方に、慎しんで感謝と敬意を表し、あわせて母校の今後益々の発展をお祈りして筆をおきます。